

## 防長俱楽部

### 歌壇俳壇

心と脳のアスレティックスへの招待

大中 忠夫

#### ■時空を超える十七文字と三十一文字

菜の花や月は東に日は西に

閑かさや岩にしみ入る蟬の声

夏草や兵どもが夢の跡

荒海や佐渡によこたふ天河

柿食えば鐘が鳴るなり法隆寺

石ばしる垂水の上のさ蕨の

萌え出づる春になりにけるかも

天の原ふりさけみれば春日なる

三笠の山にいでし月かも

むかしながらの山ざくらかな

身を徹底的に叱咤激励することが自身の進化の糧となります。

短歌俳句創作の醍醐味は、ご自身の世界と人生の感動を納得できるまで自問し続けること、そしてその折々の自問探索の到達点を記録することです。ご自身を取り巻く世界について新たに発見した魅力や感動を言葉にする。そしてその発見から振り動かされた自身の新たな思いとともに記録する。俳句と短歌は、ご自身の人生の折々に邂逅した意義、恩恵、魅力、挑戦、克服そして感動のアルバム創作活動です。

■俳句の十七文字で発見と感動を表現し、短歌の後半十四文字で思いを表現する。まずは俳句から始めてはどうでしょうか？そして折々の発見が醸成する思いを言語化したい欲求が高まれば短歌に。

二〇〇八年に投稿した私の最初の俳句と二〇一二年の最新の短歌を紹介させてください。十二年余の間、まだこの最初の俳句を超えていない自覚が、自分の世界と心を探求する気持ちを高め続けています。

四世紀初頭から四百五十年にわたる国民歌四五〇〇首を編纂した万葉集は、日本文化の原点といつてよいでしょう。この万葉集を継ぐ短歌と俳句。数千の漢字と九十余の仮名文字という、世界に比類ない表現文字数をもつ日本文化ならではの十七文字と三十一文字の世界が、防長俱楽部誌の巻末近くに扉を開けています。それは大袈裟と思われるかもしれません、千数百年の時空を超えた文化交流世界の入り口です。

#### ■現代人の心と脳のアスレティックス

筆者は短歌と俳句の素人ですが防長俱楽部の歌壇俳壇を毎回訪問すること十四年。投稿俳句一六八句、短歌は少し後からの参加で一四四首くらいになります。

この間に専門家ではない故に経験した短歌俳句と現代人との関係について感じたことをご紹介したいと思います。その先ず第一は、短歌俳句取り組みの敷居と思われがちな三十一文字と十七文字の制約についてです。実はこれが心と脳の最高のアスレティックスの場となっています。

この限られた文字数に限定して日常の発見をどこまで写実できるか、そしてその発見によって自身の心の中に生まれた思いをどうして言葉にできるか。これまで真摯、誠実、的確に言葉にできるか。これを字数制限内で試行錯誤しながら繰り返すうちに、自身の心と脳を開々た無心に探求している自分を発見します。短歌俳句の創作の敷居が、実は自分自身の心の変化を見極めるエネルギーとそれを見極めた感動を産み出してくれています。

#### ■日々の人生探求の記録

文字数制限の次に敷居を高くしているのが、専門家などからの評価が気になってしまふことかもしれません。その点についても、素人ならではのお勧めがあります。気にはしないことです。自分自身の人生のひとこまの発見と違いは、古今東西の他の誰とも比較などできない唯一無二の創作物です。ただし、ご自身の発見や思いと表現とのギャップ解消力は、他者の視点から眺め直すことで進化します。他者の視点からご自身のことを教えてくれたのが防長俱楽部の歌壇俳壇です。締切り日直前に人生の煌めきの一瞬を思い出させてくれる。これが防長俱楽部歌壇俳壇の最大の楽しみでもあります。

梅雨空の晴れ間逃さず蟬時雨  
役果たし身殻任せる蟬一羽

水田成り蛙の歓喜空に満つ

瑞穂の国に喜れ永遠なれ

田植え成りかよわき稻子並び立ち

風にそよぐも國背負うかな

#### ■季語をどうするか？

季語をどうするか？と畏まる必要はないと思います。一瞬のイメージが記録に残しておきたいと強く感じるものであれば、そのイメージの中に必ずその瞬間、時（とき）、季語にほかなりません。

蝉時雨暑き日射しの夢舞台

締切り日直前に人生の煌めきの一瞬を二ヶ月に一度、あと数日で締切日となるでしょうと考え込むことはよくあります。そこで皆勤義務のようなものにこだわると投稿が重荷になります。しかしそうい

